

研究課題	アメリカン・ルネサンス期文学にみられるメランコリーの研究 —ヘンリー・デイヴィッド・ソローを中心として—
研究代表者	西田 梨紗 (文学研究科 比較文化専攻)

1. 研究目的

本研究は、19世紀半ばのアメリカでメランコリーという言葉がどのような意味で用いられているのかを踏まえた上で、ヘンリー・デイヴィッド・ソローがメランコリーをどのような意味によって作中で用いているのかを明らかにすることを目的としている。19世紀半ばのアメリカで、メランコリーという言葉は多様な意味で使われていた。例えば、デイヴィッド・ミラーは *Dark Eden: The Swamp in Nineteenth-Century American Culture* (1989) で、当時の自然とメランコリーを結び付けて次の通り述べている—“Full of wildness and melancholy, it offered a symbolic antidote to civilization’s discontents” (Miller 30)。メランコリーとは黒胆汁と一般的に同意語とされており、人間の憂鬱に結び付くとされていたため、ミラーのこうした見解は目新しいと思われる。その一方で、ラルフ・ウォルド・エマソン、ハーマン・メルヴィル、ナサニエル・ホーソーンといった19世紀半ばの作家は、メランコリーを人間の憂鬱という意味で用いているようだ。このようにみていくと、19世紀半ばのアメリカでは、多種多様な意味でメランコリーという言葉が用いられていたといえる。

そこで、ソローの作品に出てくるメランコリーに着目すると、この作家も多様な意味でこの言葉を用いていることが分かった。*Walden* (1854) の第4章“Sounds”では、鼻の鳴き声を“melancholy sound”と形容しつつ、“I rejoice that there are owls”と肯定的に捉えている。鼻の鳴き声は「楽しむ」ことができるものであり、メランコリーは陰鬱を示すだけの語ではない。ソローが鼻の声をメランコリーであると言いながら、楽しむことができる、喜ぶことができるのは何故なのか。また、“Autumnal Tints” (1862) には、“A village needs these [plants] innocent stimulants of bright and cheering prospects to keep off melancholy and superstition”と記されており、メランコリーは人間の嫌悪する性質として扱われている。

以上の見解から、19世紀半ばのアメリカにおけるメランコリーという言葉の使い方を整理した上で、ソローが作品でメランコリーという言葉がどのような意味で用いているのかを明らかにしていきたい。

2. 研究方法

第1段階として、西洋史とアメリカ建国当初から19世紀半ばまでを中心としたアメリカ史におけるメランコリーの用いられ方を調べ、整理する。第2段階として、ソローの日記や作品からメランコリー (melancholy) を洗い出す。第3段階として、アメリカ史や当時のアメリカにおけるメランコリーの意味を考慮しながら、ソローが作品で用いているメランコリーとは、この作家の独自の意味で用いられているのか、あるいは当時においてありふれた意味として用いられているのかを検討していく。以下、段階ごとの研究成果である。

第1段階（西洋史、アメリカ史、及びアメリカンルネサンス期におけるメランコリーの用いられ方に関する調査）

●西洋史とメランコリー

・メランコリーという言葉はプラトンの時代からあった。プラトンは「メランコリス」とは頑迷の人であり、ヒポクラテスのいう黒胆汁気質ではないと考えていた。

・ストア派の人々は、賢者は狂気にはなりえないが、メランコリーに襲われることはあると述べている。メランコリーの異常性は只ならぬ才能をも意味し、預言的能力や創造的情熱もこれによるとされている。

・中世後期には、ルネサンス期フィレチェのネオプラニストを自称するマルシオ・フィチーノによって、メランコリーは再び大きな意義を与えられた。彼は自らを凶星サタンの下に生まれ、不幸な運命的疾患であるメランコリーに悩んだとしていた。

・アルブレヒト・デューラーによる *Melencolia I* (1514) は16世紀に描かれたが、16世紀の画家にとってメランコリーを描くことはサタンの子（サタンの星に生まれた人々）の絵を描くと同意義に考えられていた。

●アメリカ史におけるメランコリー

ジュリアス・ルビンは *Religious Melancholy and Protestant Experience in America* (1994) で植民地時代に清教徒が信仰とメランコリーを結び付けていたという見解を示している。ミッシェル・ロバート・ブライトワイザーは *National Melancholy: Mourning and Opportunity in Classic American Literature* (2007) で、アメリカにおけるメランコリーとは建国時に掲げた理想から遠退いた現実であるという見解を示した上で、各時代から作品を取り上げて通史的にこの問題を考察している。

●アメリカンルネサンスとメランコリー

入子文子は『メランコリーの垂線—ホーソーとメルヴィル』（2016）で19世紀中葉のアメリカで、古典的メランコリーに関してよく知られていた知識源として、ロバート・バートンの *The Anatomy of Melancholy* (1621) とデューラーの *Melencolia I* (1514) があると述べている。*The Anatomy of Melancholy* の当時における人気は絶大なもので、ソロー、エマソン、メルヴィル、ホーソーらは揃って読んでおり、これらの作家がバートンの本から大きな影響を受けたと指摘している。

1850年、1860年代に純粹直観の無限の能力に寄せる信頼が失われるなど、ロマン主義的な情熱が沈静化するにつれ、自然は道徳的洞察の避難所というよりも、ますます都市化され工業化される環境から逃れる避難所になった。ミラーは19世紀半ばのアメリカで人の手の及ばないメランコリーと結び付く自然の光景は、文明に対する不満に象徴的な解毒剤を与えたと述べている。

第2段階（ソローが執筆した日記、及び作品におけるメランコリー）

まず、ソローの気質とメランコリーについて簡単にふれる。ソロー自身もメランコリーに結び付くところがあり、心身の不調に関わる問題を抱えていた。1836年の春、ソローは結核を発病した。その後、原因が定かでない肉体と精神の不調に継続的に悩まされた。リチャード・ルポーによると、ソロー

は兄ジョンを失った時、悲しみを表には出さずに落ち着いた様子であったものの、ショックで麻痺に近い症状が起き、無感覚になり、耐え難い現実を拒否し、憂鬱に襲われたという。1861年の5月から6月にミネソタへと旅行した目的も自身の体調を気遣うためであり、乾いた空気の土地を訪れた。ソローが民間療法を取り入れていたことを考慮すると、当時流行していた *The Anatomy of Melancholy* に記されているメランコリーの数多くの症例や原因に興味をそそられていたのではないかと予想できる。

次に、ソローの作品とメランコリーについてみていきたい。ソローの作品や *Walden* にメランコリーは頻出するわけでない。しかし、メランコリーがアメリカンルネサンス期に用いられていた2つの意味として *Walden* で用いられているのは注目に値する。まず、ソローが第5章“Solitude”で人間の憂鬱な精神状態としてメランコリーを扱っている箇所に着目すると、1845年7月14日の日記がこの章の元になっていることがわかる。ソローはここで、メランコリーな人であっても自然に慰めを与えられるという見解を示している。つまり、人間にとってメランコリーとは嫌悪すべきものなのである。あわせて、1852年8月2日の日記にも、自殺に傾く状態にあるメランコリーな人が自然の景色に救われるという見解が示されている。ソローがメランコリーな人に自然が慰めを与えると長年にわたって考えているとわかるのは、メランコリーな人を“Autumnal Tints”にも登場させ、かれらはイノセントな自然に慰めを与えられると記述している箇所だ。

そして、興味深いのは、*Walden* において自然とメランコリーが結び付けられているところだ。ミラーによると、荒々しい自然とメランコリーに満ちた光景は、文明に対する不満に象徴的な解毒剤を与えたという。この時期、アメリカで鉄道網が発達するなど、未開の自然に人間の手は及んだ。こうした状況を入びとは複雑な心情でみており、機械への称賛と批判が同時に起きていた。そうした社会で、人の手の及ばない自然は入びとを惹きつけた。ソローは1852年7月5日の日記でも第4章“Sounds”の記述でも、鳥の鳴き声は“it the most melancholy sound in Nature”と述べている。ソローは「メランコリー・サウンド」を発する鳥について、人間の満たされない思いと未開の自然を連想させる存在だと記す。19世紀半ばのアメリカで、メランコリーは人間の憂鬱な精神状態を表す言葉として用いられるのみならず、未開の自然とも結び付いていた。メランコリーを彷彿とさせる鳥の鳴き声は *Walden* でまさにこの2つの意味で用いられている。そして、ソローは人間の手の及ばない自然を象徴する鳴き声を発する鳥を好むばかりでなく、そこに人間の満たされない心情を結び付けた上で、この鳥の存在を肯定していることがわかった。

第3段階（19世紀半ばのアメリカにおけるメランコリーとソロー）

ソローは同時代の作家と同様に、メランコリーを人間の憂鬱と結び付けて考えていた。一方で、自然を愛し、よく見ていたソローは、人の手の及ばない自然をメランコリーと結び付け、そうした自然を自分自身の心情に重ね、文明に対置するものとして見ることでイマジネーションを掻き立てられていた。

19世紀半ばのアメリカで、メランコリーと結び付く自然は絵画の題材ともされていたし、エマソンやホーソーンの著作にもいえるように、人間の気質の1つとしてもメランコリーは扱われていた。ソローはこうした時代に属する作家として、当時の文化や思想から影響を受けていたといえよう。

3. 研究成果と公表

本研究の成果について以下の通り、学会で発表を行った。

(1) 学術雑誌

西田 梨紗「白いスイレンの象徴性をめぐって」(『ヘンリー・ソロー研究論集』(45) 11-21、2019年)

(2) 国内学会等における発表

西田 梨紗「*Cape Cod*におけるユーモアの仕掛け」(日本ソロー学会 2019年度全国大会、東東北文化学園大学、2019年10月4日)

西田 梨紗「*Walden* とメランコリー」(日本アメリカ文学学会全国大会、東北学院大学(土樋キャンパス)、2019年10月5日)

西田 梨紗「ヘンリー・D・ソローと死の表象」(第5回カルチュラル・スタディーズ学会若手研究報告会、龍谷大学(大宮学舎) 2019年12月21日)